「さしものづくり」における架構と空間構成の変化過程

石川県鹿西町周辺の木造住宅における架構法の継承に関する研究 その1

THE PROCESS OF TRANSFORMATION OF FRAMING SYSTEM AND
SPATIAL ORGANIZATION IN "SASHIMONO-ZUKURI"Research on the framing method of timber houses at Rokuseicho,
Ishikawa prefecture Part 1

堀江 亨*, 茶谷正洋**, 八木幸二***

Tooru HORIE, Masahiro CHATANI and Koji YAGI

The purpose of this research is to clarify the process of transformation in framing of the traditional timber houses in the area of Rokuseicho, Ishikawa prefecture. The local framing system called "Sashimono-zukuri" exposes the full shape of large beams called "Sashimono" in the upper part of the main living space "Chanoma". Analyzing the arrangement of "Sashimono" and its supporting elements in relation to the spatial organization of "Chanoma", it's revealed that the reason for applying "Sashimono" is shifting from structural to aesthetic expression. Thus, "Sashimono" is disappearing in some cases, attaining the second floor for living.

Keywords : timber houses, framing system, spatial organization, process of transformation
木造住宅, 架構, 空間構成, 変化過程

1. はじめに

本研究は、石川県鹿西町周辺(図-1)における軸組木造住宅の架構法の継承される過程を、空間構成および屋根形式の変化との関係から明らかにすることを目的とする。

軸組構法による木造住宅は、線的な部材の集合として架構を成立させているが、その部材の構成、配置は、単に力学的な合理性だけによるものではなく、空間構成や屋根形式に密接にかかわっており、それらの表現形式が架構法の特徴を生み出しているといえる。本研究は、一地域における架構の変化に、地元の大工、住民の持つ家屋に対する価値観が反映されているという立場から、普請の現場で行われた部材の選択やディテールの処理などに注目することにより、架構法の継承過程を明らかにしようとするものである。

軸組における水平材の位置、構成、機能は、架構法の特徴を端的に示すものであり、こうした特徴は空間構成や屋根形式と密接にかかわる上屋¹⁾においてより顕著

に表れると考えられるが、単体の家屋においては、上屋の軸組架構は新築時の形式からの変化が起りにくい。しかし、特徴ある架構法による家屋が各年代を通じて建てられている地域に視点を当て、各年代の形式を比較すれば、架構の変化する過程をひきだすことができると考えられる。

本研究では、そのような地域として石川県鹿西町周辺

図-1 調査地域

図-2 部材名称

* 日本銀行文書局管財課・工修

** 東京工業大学工学部建築学科 教授・工博

*** 東京工業大学工学部建築学科 助教授・工博

Premises Management Division, Administration Dept., Bank of Japan, M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

応している。「さしもの組み」の入っている架構単位では1層の空間構成となるが¹⁴⁾、「茶の間」の裏手(「寝間」)の上部には「さしもの組み」が入らず、「中あま」と呼ばれる2階を設けている。

架構の構成上の核となったのが「茶の間」である。写真一1に示すように、建方作業においてまず「茶の間」の「さしものづくり」を建ち上げ、順次これを取り囲む単位架構を組み立てる工程をとる。旧来からの住宅における「茶の間」では、図一5に示すように、他の部屋のように「さしもの組み」の下方に化粧天井を貼らず、「あま」(小屋裏)下面まで吹き抜ける空間に組まれた「さしもの」を見せている。また、四周の立ち上がりには、「ひらもの」、束、貫を、漆喰で白く固めた壁面とともに配置するなど、豪放かつ意匠的な空間を呈している。

一方、新しい例では、図一6のように、「茶の間」を「さしものづくり」とせず、総2階建とし、「さしもの組み」を軸組の中層に入れず、桁回りにかけるものが見られる。

本編では、まず「茶の間」の架構を、「さしものづくり」の有無により分け、「さしものづくり」を持つものについては、軸組中層の「さしもの組み」の支持方法から、経年変化の傾向を分析し、架構の変化が空間構成に及ぼす影響を考察する。次いで、「茶の間」の垂直構面における水平材の表現形式の推移を分析し、これに伴う空間構成の変化を論ずる。

3. 「茶の間」の架構の経年変化の傾向

図一7に「茶の間」の四周の垂直構面(以下、構面と記す)の構成を、「さしものづくり」の有無と軸組中層の「さしもの組み」の支持の仕方により、a~dの4種に分類した。「さしものづくり」を持つ「茶の間」の構面をa, b, cに分け、「さしものづくり」を持たない「茶の間」の構面はdとする。

aは、中間柱を立て、「さしもの組み」の材端をほぞ差しとする方法であり、中間柱が隣接する部屋の隅柱を兼ねる場合を含む(この場合、柱を白丸で表示する)。bは、部屋境の「さしもの」を「さしもの組み」と同程度の高さに配し、これに「さしもの組み」の材端をかける方法である。cは、胴差回りの「ひらもの」から束立てし、「さしもの組み」の材端を支持する方法である。なお、「さしもの組み」と同程度の高さに「ひらもの」と同形の角材を差し、「さしもの組み」の材端を受ける例が若干見られたが、これは支持材の高さからbとした。dは、「さしものづくり」を持たないので部屋の内部には「さしもの組み」が現れない。

図一8に、主な入口と「茶の間」との位置関係から、平面構成における方位を、下手、上手、表、裏手、と定義し、主な入口が「茶の間」の右下に位置するように「茶の間」の伏図を対称変換したうえで、伏図上に、軸組中

層の「さしもの組み」の配置を記し、併せて伏図の四辺に、図一7におけるa, b, cを各々簡略図で表示した。なお、a~dの各構面には、「さしもの組み」を支持するために有効に働いていない中間柱、部屋境の「さしもの」、「ひらもの」も合わせて表示するものとする。図一8の裏手側の構面における「ひらもの」がこれに該当する。

図一9に、図一7, 8に従い模式化した「茶の間」の伏

図一5 調査住宅断面図・その1(江戸後期竣工)

図一6 調査住宅断面図・その2(昭和58年竣工)

記号	a	b	c	d
姿図				
簡略図				

図一7 「茶の間」の構面の分類

図一8 「茶の間」の構成要素の表現

図を同縮尺で配列した¹⁵⁾。図一9の縦軸は竣工年次を示し、横方向には、「茶の間」を「さしものづくり」の有無により分けたうえで、「さしものづくり」を持つものについては、軸組中層の「さしもの組み」が中間柱に支持される構面数が少ないものほど右方となるように配列し、中間柱に支持される構面数が1と0のものについては、「ひらもの」に支持される構面数の多いものほど右方となるように配列した。図一9を、構面における中間柱の省略と、水平材の補填の関係からとらえ、「茶の間」の架構の変化過程を述べる。

明治初期以前の「茶の間」では、下手側に「ひらもの」が入り、中間柱が省略されるが、これ以外の構面ではおおむね中間柱が入り、下手側を除き周囲に対する空間の開放度は乏しい。一部で部屋境に「さしもの」が入り、「さしもの組み」の材端を受けるが、この場合多くは、隅柱間いっばいに部屋境の水平材を入れるのではなく、複数の中間柱のうちの1本だけを省くために部分的に補填された形式をとっている。主として明治期より、上手側で中間柱が省略され、部屋境の「さしもの」、「ひらもの」が隅柱間に入り、空間の開放度が部屋の一辺にまで広がるようになる。さらに、表側を含め、3構面に部屋境の

水平材が入るようになり、大正期より、裏側を含め4構面すべてが部屋境の水平材に支持される形式が現れる。これらの事例では、竣工年次が下るほど多くの構面に「ひらもの」を入れる傾向が見られ、昭和初期には4構面すべてが「ひらもの」に支持される形式が現れる。なお、こうした過程のなかで過渡的に、部屋境の「さしもの」と「ひらもの」が共存する形式が見られ、また水平材の断面を「茶の間」側の半分に納めた「かたふた」と呼ばれる構法が現れるが¹⁶⁾（図一9の該当部位に「カ」と付した）、これらの評価は次章で行う。

このように、昭和初期までの「茶の間」は、「さしものづくり」を持ちながら、構面から中間柱を省略し、部屋境の「さしもの」、「ひらもの」を補完しながら、次第に空間の開放度を増し、同時に、水平構面として固められてゆくといえる。「茶の間」の全構面が、中間柱による構成から水平材による構成へ移行すれば、「茶の間」が周囲の空間に対して均質な開放性を持つようになるだけでなく、「茶の間」の内部において「さしもの組み」の配置間隔を均等化することが可能になり、単位空間としての求心性、象徴性を高めることになる。なお「さしもの組み」の配置間隔の変化については、編を改めて詳

図一9 「茶の間」の架構の変化過程

述する予定である。

一方、昭和初期以降においては、「さしものづくり」をもつ「茶の間」と持たない「茶の間」が並行して現れている。昭和初期以降の「さしものづくり」を持つ「茶の間」は、昭和初期の形式と同様に、4 構面に水平材が入っているが、表側を主に部屋境の「さしもの」を入れる傾向が強く、水平材の配置構成が「ひらもの」の減ずる方向に変化している。また、裏手側において、「ひらもの」と中間柱が共存している構面が見られ、「ひらもの」が「さしもの」の支持部材として形骸化している。このように、昭和初期以降の「さしものづくり」は、各構面の軸組中層に水平材を設ける構成を保ちながらも、各々の構面に、図一7 に示すいくつかの部材構成が選択的に組み合わさっており、昭和初期までに高められた空間の均質性が損なわれているといえる。

また、昭和初期以降の「さしものづくり」を持たない「茶の間」では、支えるべき「さしもの組み」が無く、形骸化した「さしものづくり」の構面を四周に回したものが1 例見られたほかは、構面の水平材の減少に伴い、隣室の隅柱や、建具との取り合いの上での便宜的な柱が、中間柱として配される。ここにおいて、「さしもの組み」の存在により保持されてきた構面の部材構成の対称性は断絶し、構面が便宜的な用途に転換していることがわかる。

4. 水平材の表現形式から見た架構と空間の関係

(1) 構面の表現形式の変化

ここでは、前章に述べた構面における中間柱、部屋境の「さしもの」、および「ひらもの」の取り合う構成を、水平材の表現形式から分析する。

図一10 に示すように、明治期のものでは、a のように、上手側において、部屋境の「さしもの」と「ひらもの」が共存しているものが見られ、「さしもの組み」を支持する機能が重複している。ところが明治末期以降、両者

の重複した構面では、b のように、主に上手側の「座敷」との境において、「ひらもの」を「かたふた」に納め、表現的に用いる傾向を示す。また昭和初期には、c のように、部屋境の「さしもの」が無い場合でも、「ひらもの」を「かたふた」にするものが見られ、より表現的な形式に傾斜しているといえる。さらに昭和初期の例で、d のように、隣室の「さしもの組み」の材端を受ける部屋境の「さしもの」を半分の厚さに納め、また別の構面では、「茶の間」の構面の中央に位置する隣室の隅柱を、隣室側に半柱として納めているものが見られ、いずれも「茶の間」に隣室の架構を見せないように、構面の部材構成を二重化している。このように、「さしものづくり」の構面は、部材の支持構造を直截に表現したものから、「茶の間」の内部空間を意識した意匠的な表現へ変化していくといえる。

これに対し、昭和初期以降の「さしものづくり」では、写真一2 に示すように、裏手側の構面において「ひらもの」と中間柱が共存しているものが見られ、ここでは「ひらもの」が中間柱により分断され、その機能的働きを否定されている。しかも、「さしもの組み」を支持する中間柱は、隣室の架構と取り合わない独立した柱であり、部材構成は等間隔に配置した柱とこれをつなぐ「ひらもの」による意匠表現として割り切られている。このことから、昭和初期以降、「さしものづくり」の構面は、部材の支持構造と意匠表現との整合性を無視した過剰な部材構成の表現へ移行していくといえる。

(2) 隣室との空間の連続性

「茶の間」の四周のうち、下手、上手、裏手には、各々「にわ」、「座敷」、「寝間」および「勝手」（図一4 の平面構成を参照）が取りつくため、構面の位置で部屋境を区切らざるをえないが、表側の下屋へは、構面を越境して空間を拡張しようと考えられる。ここでは特に「茶の間」と表側の下屋との部屋境に注目し、図一11 により隣室との空間の連続性を論ずる。

図一10 「さしもの組み」の支持構面の模式断面図

写真一2 「ひらもの」と中間柱の共存

明治中期までの、表側に部屋境の「さしもの」の入る事例では、鴨居、襖を設けず、部屋境の「さしもの」から吊り束により鴨居から1尺ほど高い位置までの垂れ壁としていた。これらには、aのように、下屋のとりつく位置が低く、垂れ壁のついたままのものと、下屋の垂木受けが部屋境の「さしもの」より高い位置にあり、後に垂れ壁を取り払っているものがあった。ところが、明治末期以降の同様の事例では、bのように、「茶の間」が竣工当初から、上屋の「さしものづくり」の枠組から表側の下屋までのひとつづきの空間となっている。

一方、a、bと並行して明治初期から現れている、表側に「ひらもの」を入れる事例では、cのように、下屋を2層とし、「ひらもの」が2階床組を受ける胴差として機能的に用いられているものと、dのように、下屋の天井高を意匠的に低く押さえ、「ひらもの」上端のレベルで化粧根太天井としたものがある。とくにdの形式は、他の構面も含め、三方あるいは四周に「ひらもの」が回っており、隣室への空間の広がりや、単位架構の境界で一旦「ひらもの」により低く引き締めることで、「さしものづくり」の空間的な求心性を演出しているといえる。

しかし、このような傾向は昭和初期に「ひらもの」により全構面が固められた事例まで見られ、それ以降では再び、表側に部屋境の「さしもの」を入れ、その下部を

吹き放しとするbの形式となり、空間の連続性を高める傾向に戻る。

(3) 「さしものづくり」を持たない「茶の間」

最後に、「さしものづくり」を持たない「茶の間」の内部空間が、「さしものづくり」の架構の枠組から分離していく過程を、部材構成の変化から論ずる。

図一12において、aは、部材構成においても空間構成においても「さしものづくり」から「さしもの組み」(図中破線で示す)が欠落した形式¹⁷⁾であり、構面の部材構成から機能的な意味が消去されている。図一9に示す例では、「ひらもの」が2構面で「かたふた」になるなど、構面は、空間の形骸をとり囲む皮相的な意匠にすぎなくなっている。

一方、b、c、dでは、胴差回りの「腰桁」を境に空間は2層に分割され、また「さしもの組み」は桁回りに配され、内部空間とは縁を切っている。その結果、「茶の間」は、分割自由な便宜的空間の中の区切られた1室にすぎなくなっている。ただし、bの胴差回りは、「ひらもの」回りの一段上に「腰桁」が追加された形であり、2階床組が1階の根太天井に一致するなどの直截さが見られることから、「さしものづくり」の架構の枠組の中に、「腰桁」回りの梁組が補助的に置かれた形であると見ることができる。これに対しcの胴差回りは、「腰桁」回りの

図一11 「茶の間」と表下屋の境界付近の模式断面図

図一12 「さしものづくり」を持たない「茶の間」の模式断面図

梁組が1階の化粧天井により隠蔽されることで、空間の境界が構造材から独立しており、2層に分かれた空間は、「さしものづくり」の架構の枠組から分離し、個別化しているといえる。さらに、dの胴差回りでは、「腰桁」を外側の通りに渡すことで、2階が水平方向へ拡張しており、2層の空間の垂直方向のつながりが希薄になり、空間の個別化がいっそう進んでいるといえる。この段階において、「さしものづくり」の架構の枠組は、その外形上の一体性さえ失うことになる。

このように、「さしものづくり」を持たない「茶の間」では、「さしものづくり」に見られた架構と空間の一体性が崩れてゆく。このことは、架構が内部空間の分離、拡張などの要求に応じ、その部材構成に便宜性を示してゆく過程であると見ることもできる。

5. まとめ

石川県鹿西町周辺の木造住宅における「茶の間」の「さしものづくり」の架構と空間構成の変化過程を、以下のように明らかにした。

「さしものづくり」の垂直構面には、隣室への空間の開放度を高めるための機能的な働きとして、部屋境に「さしもの」、「ひらもの」などの水平材が充填されてゆく。これに伴い、水平材の配置は、構造材としての表現から、内部空間を象徴化するような意匠材としての表現へ洗練されてゆく。さらにその配置は、過剰な部材構成による豪快な表現へ移行してゆく。一方、「さしもの組み」を桁回りにかけ、「さしものづくり」の形式を放棄した架構では、部屋境の水平材は、内部の空間構成に応じた便宜的な働きを担うようになる。こうした水平材の配置、表現の変化のなかで、「さしものづくり」は、架構の枠組が卓越し、空間構成がこれに追従する形式から、空間

構成の表現性や便宜性を優先させる形式へ移行することが明らかになった。

以上のような変化を、図—13に構面の姿図により概念的に示した。A→B→Cは、「茶の間」が「さしものづくり」を持ちながら、架構の表現形式を変化させてゆく過程を示し、B→D→Eは、「茶の間」が「さしものづくり」を失い、架構の枠組を解体させてゆく過程を示している。

今後は、軸組全体に範囲を拡張し、桁回りにかかる「さしもの組み」を含め、「さしもの組み」の配置とその機能から、架構と空間構成の関係、軸組と小屋組の関係を究明する予定である。

注

- 1) 日本建築学会民家語彙集録部会編：『日本民家語彙集解』、1985.10によれば、「上屋^{ジョウヤ}」は、『合掌や小屋梁を支えている主体構造を指す呼称』とされており、本研究においても同様の解釈をするものである。なお、上屋の範囲については基本的には、外観の一体性からではなく内部の構造材の継ぎ方から判断するものとする。これについては軸組と小屋組の関係として改めて詳述する予定である。
- 2) 鹿西町周辺を含む口能登地方における在来住宅に関する既往の研究は、おおむね戸平平面の形式または住まい方に関するものである。架構と空間との関係について扱ったものは、玉置伸悟ほか8名：『能登半島における農家住宅の分布及び口能登型住宅について—石川県の農家住宅に関する研究（その3）—』、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.847～848、1986.8などがあり、平面型の発展過程を明らかにするために架構における部材の使われ方に注目しているが、架構自体の評価までは行われていないと考えられる。
- 3) 『日本民家語彙集解』^{注1)}によれば、「差しもん」：②の『石川県能登地方の民家において、茅葺き屋根の小屋梁を示す呼称』が、本研究の「さしもの」に相当すると思われる。ただし、本研究では、この呼称を上記のように機能を限定して使うのではなく、部材の形状から広義に取り扱うものとする。
- 4) 『日本民家語彙集解』^{注1)}によれば、「胴差し」は①民家における差し物（差鴨居）を指す呼称、②2階床の根太をかける横架材を指す呼称となっている。現地では、①を「ひらもの」、②を「腰桁」と呼ぶ。これらを部材の位置する高さから見れば、①は1階内法上端の高さを示し、②は2階建住宅における2階床の高さを示すことになる。本研究では、平屋建、2階建を総括し、上屋軸組における高さの概念を示す語として、①、②いずれの意味をも含めた広義の解釈をする。
- 5) 現地では、「さしもの」を「まるもの」と呼ぶ大工も居り、「さしもの」は形状的には丸太に近い、あるいは丸太に若干手を加えた程度の意味合いが強い。現地では慣例的に側面を太鼓にして使用することから本研究ではこれを定義とした。
- 6) 本研究では、小屋梁または小屋束を受けるために水平に回った角材の高さを意味する。ただし、図—5で、上屋外周における「さしもの」の材端を桁で受ける形が見ら

図—13 「茶の間」の架構と空間の変化の概念図

れるが、この桁の高さは桁回りとは見なせず、さらに上方の、小屋組を受ける桁の高さを桁回りで見なすものとする。なお、上屋外周に桁を2重に回す形式については次編以下に詳述する予定である。

- 7) 金沢市教育委員会歴史的建築研究会編：「金沢の歴史的建築」, p. 76, 1986. 3によれば、金沢周辺の農家において同様の架構形式が「サシモンダチ」と呼ばれている。また、綾木義郎：「木造住宅の架構法と空間構成の変化に関する研究—富山県砺波市周辺と石川県鹿西町周辺—」, 東京工業大学修士論文, pp. 38~41, 1987. 3において、「さしものづくり」が、富山県砺波地方に見られる「わくのうち」と類似した架構であることを指摘し、同時に両者の細部における相違にも言及している。なお、「わくのうち」については富山県教育委員会編：「富山県の民家—民家緊急調査報告図録編」, p. 3, 1970. 2; 「建築大辞典」, 彰国社, 1976. 3などによれば、特定の部屋の架構形式を示す呼称であり、また他の部分の構造を造り上げるための核となる架構として位置づけられており、上述の綾木による論文も同様の見地に立ち、「さしものづくり」との類似性を認めていると思われる。本研究では、「さしものづくり」を「さしもの組み」に特徴づけられた単位架構として広義に解釈し、そのなかの中核的架構として「茶の間」を取り扱うものとする。
- 8) 現地の呼称。石川県教育委員会編：「石川県の民家」, p. 4, 1973. 3によれば、本研究の対象地にあたる口能登地方において当該する部屋の一般名称は「ヒロマ」であるが、地域差により、「オエ」または「チャノマ」とも呼ばれる、とされている。
- 9) 現地の呼称。「あづ（ず）まだち」とも呼ばれる。富山県教育委員会編：「富山県の民家」, p. 6, 1980. 3によれば、『アズマ建とは切妻造妻入で、建物全体を大きな屋根で覆い、正面妻面に梁と束の構成をそのまま化粧でみせる建物の形式をいう。』としている。「あづまやだち」の分布については、山本勝巳：「越中、能登の民家」, 「民芸手帳」通巻第89号, p. 20, 1965. 10所収、および、小林昌人：「能登半島の民家」, 同誌 p. 39所収によれば、能登半島南部の七尾街道沿い、特に能登部（鹿西町の一部）に多いことが指摘されている。筆者の調査によれば、「あづまやだち」は砺波から氷見、口能登にかけて分布していると思われる。
- 10) 現地の呼称。綾木義郎：（注7）, p. 7において、同様の屋根形式が、砺波市周辺では「まえおろし」と呼ばれることが指摘されている。
- 11) 本研究で扱う住宅の平面構成は、「石川県の民家」^(注8), p. 4における能登Ⅰ、Ⅱ型に該当する。同書によれば、能登Ⅰ型とⅡ型の相違は、土間側へのカッチの張り出しの有無のみが指摘されている。土間、カッチは、本研究における「にわ」、「勝手」に各々対応する。したがって本研究では、能登Ⅰ、Ⅱ型に共通する平面構成を抽出し、「にわ」と「勝手」の取り合う部分を柔軟に解釈して図—4に示すことにした。
- 12) 現地の呼称。小屋組形式を扱首構造から束構造に改変すること。玉置伸悟ほか8名：「富山県における広間Ⅱ型系住宅の間取りの特徴について—富山県における農家住宅に関する研究（その2）—」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 797~798, 1985. 10によれば、富山県において扱首組を和小屋に替えることを「屋根オロシ」と呼ぶことが指摘されている。また、「金沢の歴史的建築」^(注7), p. 74によれば、『サス構造の茅葺から、柱などの基本構造材をそのまま使用して、屋根を束・登り梁を使う構造にして瓦葺にすることを、石川県では「束立て」、もしくは「建ち上げ」という。』と指摘している。「屋根替え」については次編以降に詳述する予定である。
- 13) 調査住宅の「さしもの組み」による最大の架構単位は3間×2.5間、最小は2間×1.5間であり、2間平方程度のものが最も数が多かった。なお、「さしもの」の材径は、元口と末口とで若干（1寸程度）の違いはあるが、おおむね7寸から1尺程度であり、樹種は松が多い。「さしもの」は太く重い部材であるため、建方作業において長材を使うことができなかったと思われる。
- 14) 敷居上端から小屋裏下面までは12~18尺程度であるが、「さしもの」は小屋裏下面から2~3尺程度低い高さに組まれている。
- 15) 分析対象数33。このうち「さしものづくり」が27棟、「さしものづくり」でないものが6棟あった。なお調査対象39棟中、竣工年次が不明のもの3棟、「茶の間」の存在しなかったもの2棟、「茶の間」の「さしもの組み」の下面に化粧天井が貼られ、内部架構を見られなかったもの1棟の計6棟を分析対象から除外した。
- 16) 調査住宅においては、「かたふた」が構面に使用される場合、その隣室は天井のある畳敷きの和室であったが、隣室がそのような形式であっても「かたふた」が使われない場合もあった。
- 17) 「金沢の歴史的建築」^(注7), p. 76によれば、これと類似した架構を、金沢の農家では「オビキザシ」と呼び、明治末から大正期にかけて、「サシモンダチ」（注7参照）から「オビキザシ」への移行が見られると指摘している。

（1991年7月8日原稿受理，1991年12月9日採用決定）